

【編集後記】

◇今でも時々、但馬むしの会を結成した当時を思い出すことがあります。あれから四半世紀が経とうとしています。なぜ同好会をつくったかと言えば、故郷の但馬と係わるための理由づけがほしかったことや、但馬の昆虫を仲間と楽しみながら調べたかったことのほか、何と言っても、緑濃い山野で昆虫を追い求めるときのワクワクする感覚が最高だったからです。

当初は、情報や知識は乏しくてもフィールドへよく出かけ、充実したシーズンを送っていました。いつの頃からか、採集・調査に出かける回数がめっきり減ってしまいました。確かに昆虫に関する知識や経験は以前に比べると身についたし、会誌も立派なものが出るようになりました。ところが、最近しばしば感じる空虚さは、いったい何に起因しているのでしょうか。

現在の我々に必要なのは、まずはフィールドに出て、昆虫との触れ合いを楽しむこと。もちろん、自分なりのテーマをもつことも大切です。次に、同定力を高める努力も不可欠です。そして、得られたデータを原稿にする習慣をつけることです。各人がこれらの点をどれだけ頑張れるかで、会の今後が決まるでしょう。（谷角）

◇今年は久しぶりに予定どおり発行することができました。最近の原稿は大半がフロッピーでいただいておりますので、編集作業が格段に楽に、早くなりました。しかしその反面、内容をじっくり吟味しながらの編集作業ではなくなっているようにも感じます。

手書き原稿を入力する際、機械的に入力しようとするのですが、どうしても一度文章を自分の中に取り込んでからキーボードに向かいます。そのとき、気になる部分のはっきりすることがよくあります。

電子入稿の場合も、原稿をじっくり読むよう、心がけたいと思います。（石田）

◇年々、フィールドが次々に変わっていきます。ひとつのものに興味が長続きせず、コロコロと対象を変えるのは悪い癖ですが、今は熱帯での季節の変化にとっても関心があります。

しかし、時折日本海に面した山々に足を運ぶと、言いようのない懐かしさを感じます。津軽半島でも、山形でも、新潟でも。それはやはり、浜坂の海岸や久斗山と環境が似ていて、但馬に通った時代を思い起こさせるからでしょう。（永幡）

IRATSUME No.23

1999年5月25日発行

発行者：但馬むしの会

〒669-6801 兵庫県美方郡温泉町

黒井和之方

編集者：谷角素彦・石田達也・永幡嘉之